

ちひろ美術館・東京 No.213

安曇野ちひろ美術館 No.106

美術館だより

2021.8.31



ピエゾグラフによる わたしの好きなちひろ展

- 安曇野ちひろ美術館 2021年9月11日(土)～11月30日(火)
- ちひろ美術館・東京 2021年10月2日(土)～2022年1月16日(日)

主催：ちひろ美術館
 協賛：株式会社ジャクエツ
 後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、(公社)日本図書館協会

この秋、ちひろ美術館（東京・安曇野）では、みなさんが好きなちひろの絵で構成する展覧会を両館で同時開催します。

本展のために、3月から、その絵にまつわるメッセージとともにリクエストを募り、7月末までに、2000件を超えるたくさんの応募が届けました。

一番多くのリクエストがあった作品は「赤い毛糸帽の女の子」（表紙）です。カーネーションを持った子どもがお母さんに抱きついている「母の日」や、小さ

な両手をいっぱい伸ばしてあそぶあかちゃんがこちらを見つめる「おつむてん」などにも、多くの応募をいただいています。大切な人と過ごした時間を思い出したり、幼いころの自分や家族の姿を重ねたり、絵のなかの子どもたちの心情や未来を想像したり——ちひろの絵に寄せられたことばからは、ひとりひとりの人生や思いが浮かび上がってきます。

没後47年経った今も、身近に感じてくださいる方々の記憶のなかにちひろの絵は

生き続け、そして、時間や場所を越えて、新たな世代へとつながっていきます。

本展では、届いたメッセージとともに、ちひろの作品をピエゾグラフで紹介いたします。みなさんの大切な思いが集まってできた展覧会をお楽しみください。

（穴倉恵美子）

会期中もメッセージを募集し、特設サイト内でご紹介します。
myfavorite.chihiro.jp



母の日 1972年

母親のいない私にとって生涯あこがれの一枚です。子どものなんとも安心きったまなざし。母に抱かれる子どものぬくもりが伝わってくる、あたたかく慈愛に満ちた作品だと思います。（走る料理人 主婦）



おつむてん 1971年

知り合いにあかちゃんが生まれると、この絵を贈ります。「ちひろの絵のような子どもに育ててほしい」という願いを込めます。若い人で、ちひろを知らない人も、とてもよこんでくれます。（まりこ 高校非常勤講師）



黄色い傘の少女 1969年

後ろ姿がとってもかわいい。雨の憂鬱な気持ちを黄色が吹き払ってくれる。

（Chiyo 会社員）



緑の風のなかで 1973年

やさしい風と光に包まれて未来を見つめる女の子。心のなかにはちょっぴり不安もあり、これからどうなっていくのか……。それでも振り返った彼女の瞳のなかには希望が満ちている。（Sakamit 主婦）



あごに手をおく少女 1970年

こんな子ども、いるわけない……と思っていたら、友だちの子どもがそっくりでした。これって写生だったんだ、とちひろの技巧に改めて舌を巻きました。

（上野千鶴子 社会学者）

リクエスト集計結果 トップ10

*上位10作品は両館で展示します

1	赤い毛糸帽の女の子
2	母の日
3	おつむてんてん
4	蝶と子どもたちの幻想
5	緑の風のなかの少女
6	緑の風のなかで
7	ランドセルをしょって並んで歩く一年生
8	雪のなかを走る子ども
9	海とふたりの子ども
10	バラと少女



バラと少女 1966年

おしゃれをして少し緊張しているような女の子の表情、帽子とドレスとくつも、とにかくかわいらしい。衣装とバラの淡いピンク色がとてもきれいです。さまざまところで目にすることの多い作品ですが、やっぱり大好きです。

(harumy 派遣社員)



緑の風のなかの少女 1972年

24年前の夏、安曇野で出会った少女。あの日のまますと風のなかでほえんでくれています。その姿に娘を重ね合わせていたことが、今も懐かしく思い出されます。

(ねこはは)



貝をならべる少年 1967年

ちひろの絵のなかにいる子どもたちの、指先の表現がたまらなく好きです。細くても弱い指先、その先にある未来をつかむ予感、想像力をかき立てられます。

(スチャダラパー Bose ラッパー)



踊るカーレン『あかいくつ』(偕成社)より 1968年

私がちひろさんの絵を好きになったのは、アンデルセンの童話の挿し絵を見てからです。踊り続けるカーレンは少し悲しく、でも、ピンク色の服と赤いくつが印象的で、心に残ります。

(ラベンダー 主婦)



戦火のなかの少女

『戦火のなかの子どもたち』(岩崎書店)より 1972年
おのの
悲しみ深ければ、慈悲も深し。戦禍に慄く少女のくすんだ色の表情には深い悲しみがあふれ、それに注がれるちひろさんの深い慈悲があらわれています。今も戦火の絶えない地域の子どもたちへの慈悲のメッセージとして、観るものの心に生き続けていくはずで。 (姜尚中 政治学者)

ちひろ美術館のアーカイブと「ピエゾグラフ」

ちひろの作品の多くは、描かれてから50年近い歳月が経っています。ちひろ美術館は、長年にわたって作品の保存に努めてきましたが、淡くやわらかな色彩の水彩画は脆弱で、時間の経過にともなう紙の劣化、絵の具の退色は避けられません。

そこで、2004年より、その時点の作品の状態をデジタル情報として記録し、保存していくアーカイブを進めてきました。同時に、そのデジタル情報をもとにして、ピエゾグラフの制作を進めています。ピエゾグラフとは、耐光性のある微小インクドットによる精巧な画像表現で、ちひろの繊細な水彩表現を高度に再現しています。17年にわたるアーカイブの成果をご覧ください。

ちひろの歩み—童画から絵本へ—

●2021年10月2日(土)~2022年1月16日(日)

東京館での「わたしの好きなちひろ展」との同時開催となる本展では、1940年代後半から70年代にかけての子どもの本の大きな転換期に活躍したいわさきちひろの画業をたどります。

童画家として

子ども時代に絵雑誌「コドモノクニ」を目にして育ったちひろは、岡本帰一や武井武雄、初山滋の描く、夢あふれる童画に憧れて育ちました。「童画」ということばは、子どものために描かれた絵の総称として大正時代に生まれたことばです。1920年代から30年代、絵雑誌「コドモノクニ」(1922年創刊)で活躍した草創期の童画家たちは、童話や童謡の挿し絵と見られていた子どものための絵を、文学から離れて一枚絵としても鑑賞できるものへと高めよう、子どもの純粋な童心に届く絵を描こうと、新しい童画を生み出し、子どもたちを魅了しました。

第二次世界大戦後の1946年7月、戦争によって根絶やしにされた子どもの文化を復興しようと、童画家たちは日本童画会を設立します。戦後、画家として生きる決意をしたちひろは、日本美術会や前衛美術会に参加する一方で、1947年11月



図1 「あかい せーたー」 1959年 絵雑誌「チャイルドブック」1959年12月号(チャイルド社)

に日本童画会にも入会し、憧れの武井や初山に出会い、新しい時代を担う童画家として期待されました。仕事の上でも新聞や婦人雑誌に絵を描くかわら、次第に児童雑誌や童話集、紙芝居の仕事の依頼が増えていきました。

当初から子どもを画題にした絵の多かったちひろですが、母親となって子育てを始めてからは、息子やその友だちをモデルにいっきとした子ども像を描いて母親たちの共感を呼びました。「よいこのくに」「キンダーブック」「こどものせかい」など数多くの絵雑誌に描くようになり、気がつけば自然に童画家と呼ばれるようになったといえます。

絵本画家へ

1956年に創刊された福音館書店の月刊物語絵本「こどものとも」は、一冊すべてをひとりの画家が描く「絵本」を月刊で出版する画期的な企画でした。その準備のためにいろいろ絵雑誌に目を通した編集者の松居直は「いわゆる日本の童画は、その頃マンネリズムで非常に類型的になっていて、ちっとも面白くない」と感じていたといえます。そのなかで、ちひろのフレッシュな感覚が印象に残り、「こどものとも」12号に起用しました。この『ひとりできるよ』が、ちひろの最初の絵本となりました。



図2 「ひとりできるよ」 「こどものとも」1957年3月号(福音館書店)

主催：ちひろ美術館 協賛：株式会社ジャクエツ

1960年代に入ると、日本でも絵本を手がける出版社が増え、赤羽末吉や瀬川康男、長新太、田島征三ら童画の枠からはみ出した画家たちが活躍をはじめ、「絵本」が画家たちの新たな表現の舞台として注目されるようになりました。

ちひろの仕事の中心も1960年代半ばには絵雑誌から絵本へと移っていきました。1968年に発表した『あめのひのおるすばん』は、ちひろが独自の絵本の表現をつかんだ作品です。一枚絵としての完成度を高める童画的な描き方ではなく、最小限の描写に抑えた連続する絵とことばによって、雨の日にひとりで留守番をする少女の心の世界を描き出しています。甘い絵といわれることに悩んでいたちひろに、共同制作者である編集者・武市八十雄は、かわいものに目がいくのは天性の資質なのだからその道をいこうと励ましたといえます。自分のなかにある幼いころの心呼び覚ましてのびやかに描いたこの絵本は、ちひろの画業の大きな転機となると同時に、日本の絵本に「感じる絵本」と呼ばれる新たなジャンルを開きました。



図3 「あめのひのおるすばん」(至光社)1968年

ちひろは絵本づくりへの挑戦を続け、1974年に55歳で亡くなるまでに40冊余りの絵本を描きました。今も愛され続ける絵が生まれた背景をご覧ください。(上島史子)

●安曇野ちひろ美術館での展覧会

ちひろ美術館コレクション 絵本で世界を旅しよう！

●2021年9月11日(土)~11月30日(火)

新型コロナウイルス感染拡大の影響で私たちは移動や旅行に注意が必要な生活を経験しています。しかし絵本の世界には制限も心配ありません。世界各地の画家が描いた作品を、さまざまな国を思い浮かべながらご覧ください。

『ナディとシャオラン』(図1)は台湾で生まれ、中央アメリカのコスタリカで育ったウェン・シュウの作品です。中国の切り絵とパナマのモラ刺繍を組み合わせた手法で、コスタリカの暮らしを色鮮やかに表現しています。鳥類が豊富なコスタリカのなかでも、特に美しいといわれるケツァールを思わせる鳥や、世界的産卵地を持つウミガメなども描かれています。

『十万本の矢』(図2)は中国の代表的な物語、三国志の絵本です。建物が連な



図1 ウェン・シュウ(コスタリカ)『ナディとシャオラン』より 2008年



図2 于大武(中国)『三国志絵本 十万本の矢』より 1997年

る広い宮殿で大勢を従える呉の王に、蜀の智に優れた軍師諸葛孔明が見える場

主催：ちひろ美術館 協賛：株式会社ジャクエツ

面です。腹の探り合いをするような登場人物が描かれています。

国鉄100周年記念につくられたレコード「美しき日本・民謡の旅」のシリーズのレコードジャケットには赤羽末吉が絵を描いています。東北本線(図3)では青森のねぶたや八戸えんぶり、小さく描かれた名品には八幡馬などが紹介されています。国内旅行も楽しみですね。

(矢野ゆう子)



図3 赤羽末吉(日本)『美しき日本・民謡の旅 民謡・東北本線(その三)』レコードジャケット 1972年

没後1年 田畑精一『おしいれのぼうけん』展

●2021年9月11日(土)~11月30日(火)

『おしいれのぼうけん』(1974年)は234万部を超すミリオンセラーとして、今も絶大な人気を誇ります。子どもの心に届く絵本をつくりたいという田畑の原点には、自らの戦争体験がありました。

軍国少年として 自伝的絵本『さくら』

「日・中・韓 平和絵本」シリーズの1冊として制作された『さくら』(図1)は、田畑の自伝的絵本です。日中戦争が始まる1931年に生まれた「ぼく」は、教科書も新聞も聖戦一色に染まっていくなか、軍国少年として育ちました。終戦の年に空襲で家の工場を焼かれ、過労で父が病死します。敗戦後、母を支え貧しさに苦しむなかで、戦争の意味を疑うようになります。絵本の下絵のダミーには、戦後、聖戦から一転して平和や民主主義を語り始めた大人たちへの不信感



図1 『さくら』(童心社)より 2013年

が赤裸々に記されています。

人形劇から子どもの本の仕事へ

1950年の高校卒業の春に人形劇団ブークの公演を観た田畑は、舞台でいきいきと演じられる人形劇に心を奪われます。京都大学に入学しますが、朝鮮戦争で学内が反戦運動で騒然とするなか、学ぼうとしている原子物理学が人の幸福に役立つのか疑問を抱きます。原子爆弾をつくり戦争を続ける大人に平和は期待できない。未来を生きる子どもに希望を託し、「子どもたちを人形劇で感動させたい。そして生きることの楽しさ、すばらしさを伝えよう。そうしたらきっと戦争なんか大嫌いな子どもたちが育つだろう」と大学を中退して人形劇の道に入ります。所属した人形座では人形の頭などを制作し、木彫の研鑽が後に子どもの躯体の描写にも生かされています。

63年の人形座解散後、交流のあった作家の古田足日の誘いで、66年に『くいしんぼうのロボット』で初めて子どもの本の仕事を手がけます。以降、古田とは紙芝居や読み物などでコンビを組み、『おしいれのぼうけん』では、作家と画家と編集者が三位一体となった、新たな絵本づくりに挑戦していくことになります。*

主催：ちひろ美術館 協賛：株式会社ジャクエツ 協力：童心社、偕成社、白梅学園大学・白梅学園短期大学 子ども学研究所 古田足日研究プロジェクトチーム、人形劇の図書館、人形工房



図2 『ゆうちゃんのゆうは?』(童心社)より 1981年

共作絵本の広がり

『おしいれのぼうけん』で取り組んだ作家との共作の姿勢は、神沢利子の『ゆうちゃんのゆうは?』(図2)にも引き継がれます。弟の名前の「ゆう」は、「ゆうゆう」のゆう。広い海のように、大きな山のようにでもあるという、神沢の詩のようなことばを受けて、田畑は信州の山々を登りスケッチを重ねています。絵本にあわせて画風や画材を吟味した田畑は、透明水彩の習熟にもこだわり4年の歳月をかけて絵本を仕上げました。

本展では『おしいれのぼうけん』『ダンブえんちょうやっつけた』『ゆうちゃんのゆうは?』『さくら』などの絵本原画や習作、人形座時代の人形なども展示し、子どものために作品をつくり続けた田畑の思いを浮き彫りにします。(山田実穂)

*美術館だより ちひろ美術館・東京 No.211をご参照ください。

エリック・カールさんをしのんで

※安曇野ちひろ美術館で「ちひろ美術館コレクション エリック・カールさんをしのんで」(2021年9月11日~11月30日)を開催します。

今年の5月、エリック・カールが91歳で亡くなった。

ちひろ美術館には現在、世界中の200名をはるかに超える絵本画家の作品を収蔵し、絵本関係の美術館では世界最大規模のコレクションがある。実は、そのコレクションを始めるきっかけになったのがエリック・カールとの出会いだった。

いわさきちひろ絵本美術館(現ちひろ美術館・東京)ができたのはちひろの没後3年目の1977年のことだった。自宅を半分壊してつくった美術館は、住宅規模の本当に小さなもので、収蔵作品はちひろの作品しかなかった。しかし、夢だけは大きく、絵本を芸術表現の1ジャンルと位置づけ、絵本原画を美術作品として展示し、将来的には散逸しやすい絵本原画を収集、保存、研究、公開する美術館にしたいと考えていた。世の中にはまだ絵本専門の美術館はひとつもなかった。開館して8年目の1985年、エリック・



Eric Carle, Rooster, Collection of The Chihiro Art Museum. © (1985) by Penguin Random House LLC.

カールが来日したとき、私は初めてエリックに会った。つたない英語でちひろ美術館を紹介し、将来の夢を語った。すると、エリックが私の肩をだきながら、「それはすばらしい、ぼくの仕事に寄贈しよう」といった。確かにそういったように聞こえたのだが、会ったばかりの若造にそんなことをいうはずはないと半信半疑でいたところ、数日後に色鮮やかな作品「おんどり」が届いた。作品には「ちひろ美術館へ愛をこめて」というメッセージが添えられていた。ちひろ美術館が、本気で絵本原画のコレクション計画を考え始めたのはそれからだった。

その後、私がマサチューセッツ州のノーサンプトンという閑静な小さな町にあるエリックのアトリエを訪ねたり、彼がちひろ美術館に來たりして交流が深まっていった。彼の家に泊めてもらい、森や池の畔を歩きながら、いろいろな話を聞いたのも一度や二度ではなかった。

1929年にアメリカで生まれたエリックは、6歳で両親の故郷、ドイツに渡る。第二次世界大戦が迫るなか、父はナチスの兵士になる。エリック自身は軍国少年に育っていった。戦後、抑留されていた父が戻ってきたときのショックについても話してくれた。動物が大好きで、彼が

松本 猛 ちひろ美術館常任顧問

愛してやまなかった父は、やせ細り、人が変わってしまっていたそうだ。

イラク戦争で、アメリカのブッシュ大統領が、大量破壊兵器があるという口実をつけ、イラクに侵攻したときも、エリックはどんな理由があっても戦争は絶対してはならないといった。少年時代に爆撃を経験し、戦争は罪もない子どもを含めた民間人のいのちを奪うことを、身をもって知っていたからだろう。

ちひろ美術館とエリックが親しくなったのは、私たちが「子どものしあわせと平和」という理念を掲げて美術館を運営していたのも大きな理由かもしれない。いつごろだったろうか、エリックは、「ぼくもこんな美術館をつくりたい、猛、手伝ってくれるか」といった。美術館づくりが具体化し始めたとき、私はアメリカに赴いて、少しばかりのお手伝いをさせてもらった。エリック・カール絵本美術館が開館したのは2002年だった。

エリックが子どものよろこび絵本をつくり続けたのは、子どもは幸せでなければならぬ、という信念があったからだ。これからも彼の絵本は子どもたちの心のなかに生き続けていこう。茶目っ気があって人をよろこばせることが大好きな人だった。

安曇野ちひろ美術館 「現代の町絵師 笑いと反骨の画家 田島征彦展」 関連イベント

●2021年6月5日(土)、6日(日)、8月7日(土)、8日(日) 田島征彦アーティストトーク

●8月7日(土) 田島征彦ワークショップ 「さあ、みんなでじごくゆきじゃ! じごくのじゅうにんにへんしん!」

アーティストトーク

6月と8月の二度にわたり、染色家で絵本画家の田島征彦さんが、絵本の制作やご自身の戦争体験、これからの活動について語りました。また、田島さんによる、絵本の「読み語り」に、会場は笑いにつつまれ、ときには参加者が涙する場面も。ここではトークの一部を紹介します。



型染めのインсталレーションの前で話す田島さん

『じごくのそうべえ』

地獄の絵本をつくることになり、のちに家族ぐるみで交流が続いた桂米朝師匠の落語「地獄八景亡者戯」を思い出しました。何度も聞いているうちに次々と発想が浮かんできて、「一生のうちに二度と、いや、日本が減びるまで、こんなおもしろい絵本は出てこないだろう!」と(笑)。でも、いざ出版されると非難轟々で、幼稚園から、こんな下品な絵本は置けないといわれるほどでした。

自分がおもしろいと思う絵本を

ある日、養護学校の先生が訪ねて来て、生徒たちに『じごくのそうべえ』を読むとすごよるこぶと話してくれました。ひとりの生徒は、この絵本を手で「とざいとうざい、とざいとうざい!」

といいながら廊下を歩いていると。その子が生まれて初めて意味のあることばを口にしたと聞きました。すごうれしかったですね。子どもにうける、これをいうと子どもがおもしろがるというのではなく、僕がおもしろいからやっている。ほかの絵本でもそんなんです。

淡路島での暮らし

約20年前に淡路島に引っ越ししました。淡路島に住んで一番感動したのは風景です。段々畑が続き、登りつめていくと180度近く海が広がっている。そこを毎日いろんな船が通って、季節によって海の色も変わっていく。飽きないんですね。ここで絵本ができないはずがないと。島に来てから3冊の絵本をつくりました。

沖縄を伝えたい

絵本を描くとき、主人公はいつも僕自身なんです。5歳のとき、大阪の堺で弟のセイちゃん(絵本画家・田島征三)と空襲にあいました。もし、同じときに、堺ではなく沖縄に住んでいたらどうなっていたか。すべてが戦場になって、米軍が上陸してくるなかを、5歳の僕はどう逃げ回ったのだろうか。きっと、生きていなかったと思う。でも、今を生きている者として絵本を描いているんです。今、僕がやらなきゃいけないと思っているのは沖縄戦を真正面から取り上げて、戦争とはなにかを描くこと。子どもたちを怖がらせるんじゃなくて、島の人たちといっしょに僕らも沖縄のことを考える絵本にしたいと思っています。

ワークショップ 共催:松川村図書館

『じごくのそうべえ』にちなんだワークショップを開催し、松川村すずの音ホールを会場に地元小学生ら12名が参加しました。



読み語りでイメージを膨らませた後、鬼や閻魔様になりきるお面と衣装を工作して「じごくのじゅうにん」に変身しました。



田島さんが描く背景画に、「白い絵の具で針山地獄を仕上げて」、「こっちの熱湯地獄に赤で炎を描いてくれるか」と応援を頼まれると、子どもたちは真剣な表情で筆を動かしていました。これまで、子どもたちといっしょにワークショップを行う経験は多くなかったという田島さん。この貴重な機会に、参加した3年生の男の子は「田島先生の助手になりたい!」と目を輝かせていました。(畔柳彩世)



ちひろ美術館・東京「生誕111年 赤羽末吉展 日本美術へのとびら」関連イベント

2021年6月27日(日) 赤羽茂乃講演会「赤羽末吉の旅と絵本」

共催:石神井図書館・貫井図書館・南田中図書館 文化庁 令和3年度 地域と共働した博物館創造活動支援事業

ちひろ美術館に近い石神井図書館を本会場に、さらに2館の図書館と中継で結ぶ新しい形で、赤羽末吉研究者として活躍する赤羽茂乃さんの講演会を開催しました。一部を紹介します。(川添さやか) 雪国通いから生まれた、雪の絵本

敗戦後、生活が落ち着いてくると旧満州(中国東北部)時代から持ち続けてきた雪国への憧れがつのり、新潟や福島など、豪雪地帯を選んでの、赤羽末吉の雪国通いが始まります。絵本を描くあてもないころに、雪が描きたい、雪を知りたいという思いだけで雪国に通い続けたからこそ、絵本『かさじぞう』が描けたのだと思います。10年にも及ぶ雪国通いは『つるようぼう』など多くの作品を生み出しました。雪の美しさ、怖さを描くだけでなく、人間のこまやかな心情を雪

に語らせていると感じます。雪のなかをひとり歩き、人々のあたたかさや暮らしの厳しさにふれ、自らの内面に対峙した父ならではの表現方法だと思います。旅を通して地方に伝承されてきた民話や昔話について考えるようになり、昔話絵本に取り組む大きな力ともなりました。



赤羽末吉『かさじぞう』(福音館書店)より 1960年

『源平絵巻物語』シリーズ

父はこの作品の制作にあたり、京都、近江、須磨、瀬戸内から北陸を抜けて平

泉まで、源義経のたどった道を歩き、取材しました。須磨の鶴越の坂では、どうしたらこの坂を馬で駆け下りられるのかと、実際に見て回り、そうかと納得して描いたそうです。このように綿密な取材や研究を重ね、作品に生かしていききました。

絵本への旅

「子どもは絵本の中で人生体験をやるんです」と語っていた赤羽末吉。どんなつらい状況のなかでも、赤羽は客観的な視点を常に持ち、ユーモアも忘れずに困難を乗り越えてきました。子どもたちが自分の絵本を読んで、豊かな体験を積み重ねていってくれればと願い、人生の経験のすべてを生かして、とことん誠実に絵本と向き合った、それが赤羽末吉の絵本への旅であり、人生の旅路でした。

東京
美術館
日記

7月11日(日) ☀️ のち 夕・🌩️
閉館時刻近くに、雹混じりの激しい雷雨となり、お客さまには館内でしばらく待機していただく。1歳くらいのお子さんが、エントランスから雹の降るようすをじっと見つめていた。

7月24日(土) ☀️
茨城県立近代美術館で「いわさきちひろ展」開催(8月17日まで)。展示室には、体験型のplaplastのインスタレーションも出現。感染対策を取りながらも、大人も子どももちひろの世界を体感する“あそび”に夢中。

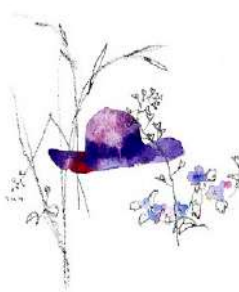
7月27日(火) ☁️
新刊『ちひろダイアリー』は、いわさきちひろの生涯を、ちひろ自身のことばと作品、折々の写真で

たどる一冊。結婚、子育て、仕事と家事の両立、親の介護など、日々を懸命に生きたちひろの姿が、ひとりの等身大の女性としてつづられている。ちひろの真摯なことばと未来への希望に満ちた作品が、この時代に生きる人たちにとって光明となれはうれしい。

8月1日(日) ☀️
練馬区内にある2つの美術館と3つの図書館をめぐる「ぐるりん絵と本スタンプラリー」(文化庁令和3年度地域と共働した博物館創造活動支援事業)が始まる。3カ所以上のスタンプを集めたら、特製しおりをプレゼント。「スタンプはどこで押せますか」と初めて来館してくれた親子の姿も。ぜひ、また遊びに来てね。

8月3日(火) ☁️ のち ☀️
小学生T君が宿題のために来館、図書室の「ひとことふたことみこと」ノートにメッセージを残してくれた。「今年ちひろさんを知ったばかりは昔のことがもっと知りたくなりました。一どは会いたかったです。未来のぼく この手紙を読んでみてね!!」

8月8日(日) ☁️
ちひろの没後47年、終戦76年となる今年の「ちひろ忌」に、1ヵ月間の寄付キャンペーンを開始。「少しでもお役に立てれば」とのお気持ちに心より感謝。寄付金は、日常的に美術館を訪れることが困難な子どもたちが、絵本や美術を楽しめるような活動を充実させるために使わせていただく。



安曇野
美術館
日記

6月5日(土) ☁️
トットちゃん広場5周年『窓ぎわのトットちゃん』展にあわせて開催する“みんなの夢プロジェクト”。松川村の子どもたちがにじみの水彩技法を用いてつくったオーナメントに夢を書き、そこにお客さまがそれぞれの夢を寄せ書きするという企画。外出が難しい方が自宅で作ったものを送ってくださったり、インドネシアの「子どものためのお話フェスティバル」(Tacita)に参加した子どもたちからも夢を書いたオーナメントが届いたり。直接対話や交流することが難しいなか、お心を寄せていただいでうれしく思う。日々増えていくみんなの夢を読むのもささやかな楽しみ。



多目的ギャラリー・展示風景

7月20日(火) ☀️
お客さまより、ちひろ館の中庭に巣から落ちた雛がいるとのお声かけが。あわてて見てみると、ニシキギに巣をつくっているヒヨドリの子が飛ぶ練習をしていた。つたない飛び方にハラハラするが、近くに親鳥がいたので手を出さず見守る。一週間ほどで無事飛び立った。

7月24日(土) ☀️
トットちゃん広場でトットちゃんの夏祭り・5周年祭を開催。黒柳徹子館長からのメッセージも紹介

し、平和への願いを込めて、土に還る素材でできたハト風船を放天した。



開園5周年を記念して公園の一角にオープンした野外学習ゾーンでは、火起こしをするイベントも。宝さがしゲームでは、汗だくになって園内に隠された宝の鍵を探すのが、砂場に埋めた鍵がなかなか見つからず、スタッフ総出で探すことに。お宝を手に入れた子どもたちの笑顔は、太陽に負けないうらまぶしかった。



窓

「本当の別れは、忘れてしまうこと」
竹辺祐子(公財)いわさきちひろ記念事業団

広島は、76年目の8月6日も好天でした。我が家は祖母と叔母が直接被曝、母ともうひとりの叔母が二次被曝しましたが、戦後10年経った私の子ども時代にも、爆心地近くの川には被爆瓦が見つかり、原爆スラムと呼ばれる一角もあって、爪痕は残っていました。保存が取り壊しかで市を二分した原爆ドームの保存が決まったのが1966年。私が生まれる一年前の55年には、広島平和記念資料館が開館しました。もの心つくころからよく連れていかれた当時の資料館は、独特の空気が生々しく漂っていたように覚えています。

YA文学『ワタシゴト 14歳のひろしま』は、修学旅行で広島の平和記念資料館を見学する中学3年生の物語。中身が黒焦げになった弁当箱、手づくりの愛ら

しいワンピース、溶けたゴムの所に名前が書き込まれた小さな布靴、被爆など、主を失った遺物を通して、中学生が被爆の実相に向き合う姿、向き合いきれない姿が、ひとりひとりが抱える日々の生きづらいつらいつらとともにつづられます。

今、平和記念資料館は、生徒たちにとって、「つまらない」「おもしろくない」と敬遠される所になっているようで、少子化の影響も加わり、修学旅行者数は年々減少してきています。確かに、広島も長崎も沖縄やアウシュヴィッツも、戦跡資料館はアミューズメントパークのようにうきうき楽しい場ではありません。ちひろ美術館を含め、美術館や博物館の多くは、知的刺激に満ちた、心安らく楽しい場で(ありたいと思っています)ですが、戦跡資

料館や災害記録館などは、心安らく場ではありません。だからこそ学校などでの目的ある訪問が計画されるのでしょう。

2021年8月6日の平和記念式典で、小学6年生のこども代表ふたりは、「本当の別れは会えなくなるのではなく、忘れてしまうこと。私たちは、犠牲になられた方々を決して忘れてはいけないのです」と語りました。「私たちの願いは、日本だけでなく、全ての国が平和であることです。(中略)誰もが幸せに暮らせる世の中にするのを、私たちは絶対に諦めたくありません」と。受け止めることが辛い事実、現実を、どのように伝えていくか、美術や文学、音楽や演劇、映画などとともに、美術館博物館の役割は大きく、その真価が問われています。

ちひろ美術館(東京・安曇野) イベント予定

各イベントの予約・お問い合わせは、各館へ。ちひろ美術館・東京 TEL.03-3995-0612 安曇野ちひろ美術館 TEL.0261-62-0772
 下記のイベントおよび展覧会の会期は予告なく変更になる可能性があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧ください。 chihiro.jp   

【ちひろ美術館・東京、安曇野ちひろ美術館 共通で開催】
 〈わたしの好きなちひろ展 関連イベント〉

●ちひろ美術館 東京・安曇野をつなぐオンライン鑑賞会
 ○日時：10月16日(土) 17:00～ ○参加費：無料 ○定員：50名
 ○申し込み：要事前予約(美術館公式サイトにて)
 ちひろ美術館・東京と安曇野ちひろ美術館をオンラインでつなぎ、開催中の「わたしの好きなちひろ展」の見どころを紹介します。

●敬老の日

○日時：9月20日(月・祝)
 この日、65歳以上の方は入館無料です。受付にてお申し出ください。

【ちひろ美術館・東京で開催】

●あかちゃん・子どものための鑑賞会(オンライン)

文化庁 令和3年度地域と共働した博物館創造活動支援事業
 ○日時：12月12日(日)
 ○講師：富田めぐみ(NPO法人赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会代表)
 ○対象：10:30～11:30 あかちゃん(0～2歳と保護者)
 13:30～15:00 子ども(3歳～小学生と保護者)
 ○参加費：無料 ○定員：各回8組
 ○申し込み：要事前予約
 (美術館公式サイトにて11月12日より受付開始)
 あかちゃん・子どものための鑑賞会を数多く手がけてきた講師が、親子で作品を鑑賞するヒントなどをお話します。

●ちひろの誕生日

○日時：12月15日(水)
 いわさきちひろは1918年12月15日に生まれました。この日ご来館の方には、ちひろのことばカードを差し上げます。

●休館のご案内

【安曇野館】
 ○冬期休館：12月1日(水)～2022年2月28日(月)
 2022年3月1日(火)より開館を予定しています。
 【東京館】
 ○年末年始休館：12月27日(月)～2022年1月1日(土)
 2022年1月2日(日)より開館します。
 ○冬期休館：2022年1月17日(月)～3月11日(金)
 3月12日(土)より開館を予定しています。
 2022年の展覧会情報は、決まり次第公式サイトにてお知らせします。

〈新刊紹介〉

●『ちひろダイアリー』

○編著者：竹迫祐子・ちひろ美術館
 ○発行所：河出書房新社 ○発行日：2021年7月27日
 ○価格：2145円(税込) ○体裁：A5版144ページ



【安曇野ちひろ美術館で開催】
 〈田畑精一展 関連イベント〉

●学芸員によるスライドトーク「田畑精一の絵本づくり」
 ○日時：11月3日(水・祝) 14:00～
 ○会場：安曇野ちひろ美術館
 ○参加費：無料(入館料別) ○定員：40名
 ○申し込み：要事前予約(美術館公式サイト、TEL.0261-62-0772にて)
 子どもの心に届く作品をつくりたいと語った田畑精一の絵本づくりについて、担当学芸員がスライドを使って解説します。

〈絵本で世界を旅しよう! 関連イベント〉

●コレクション画家によるアーティストトーク(オンライン)

○日時：10月24日(日) 予定
 ○申し込み：要事前予約(美術館公式サイトにて)
 絵本画家 ポロルマー・パーサンスレンさん(モンゴル)に作品や絵本づくりについてお話を伺います。

●いい育児の日

ベビーカーでおでかけ、ファーストミュージアムデー

○日時：11月19日(金) 10:30～11:30
 ○会場：安曇野ちひろ美術館
 ○対象：0歳から2歳の子どものとその保護者
 ○参加費：無料(入館料別) ○定員：10組
 ○申し込み：要事前予約(美術館公式サイト、TEL.0261-62-0772にて)
 ファーストミュージアムとは、生まれて初めて訪れる美術館。0歳から2歳のお子さんとともに、あかちゃん絵本のおはなしの会や、開催中の展覧会「わたしの好きなちひろ展」のガイドツアーなど、安曇野ちひろ美術館を親子でゆっくり楽しみましょう。

●長野県民感謝デー

○日時：11月27日(土)
 日ごろの感謝の気持ちを込めて、この日、長野県にお住まいの方は、入館無料になります。ご家族やご友人をお誘いあわせのうえ、ぜひご来館ください。※受付でご住所のわかるものをご提示ください。

〈他館でのピエゾグラフィ展〉

●ピエゾグラフィによる わたしの好きなちひろ展

○日時：9月10日(金)～11月23日(火・祝)
 ○会場：「ちひろの生まれた家」記念館
 〒915-0068 福井県越前市天王町4-14
 TEL.0778-66-7112

●ちひろ美術館コレクション

ピエゾグラフィでたどる いわさきちひろと日本の絵本(仮)

○日時：2022年1月8日(土)～3月6日(日)
 ○会場：しもだて美術館
 〒308-0031 茨城県筑西市丙372
 TEL.0296-23-1601



「あかい くつ」1960年

CONTENTS 〈ちひろ美術館・東京/安曇野ちひろ美術館〉ピエゾグラフィによる わたしの好きなちひろ展…②③ / 〈ちひろ美術館・東京〉ちひろの歩み—童画から絵本へ— / 〈安曇野ちひろ美術館〉ちひろ美術館コレクション 絵本で世界を旅しよう!…④ / 〈安曇野ちひろ美術館〉没後1年 田畑精一『おいしいのぼうけん』展 / エリック・カールさんをしてのんで…⑤ / 〈活動報告〉田島征彦アーティストトーク ワークショップ / 赤羽茂乃講演会…⑥ / 東京美術館日記 / 安曇野美術館日記 / 窓「本当の別れは、忘れてしまうこと」…⑦

美術館だより 合併号 No.213/106 発行2021年8月31日